

令和2年度 奈良市立平城こども園 研究実践概要

園長名 森口 千鶴代

全園児数 125名

1、研究主題

「豊かな心をもち、いきいきと遊ぶ子どもの育成」

－ “やってみたい” が実現できる環境構成や援助の在り方－

2、研究年度

3年度

3、研究主題設定理由

昨年度は、いろいろな人や物と関わる中で、子どもが心を動かしいきいきと活動している場面を出し合い、環境構成や援助はどうであったかを共有してきた。今年度は、更に子どもが“やってみたい”と思ったことが実現できるような環境構成や援助について考えていく必要性を感じた。また、新しい生活様式の中で、子どもが心から“楽しい”“もっとやってみたい”という思いを実現していくために環境構成や援助をどのように工夫していくか、研究を進めていきたいと考えた。

4、具体的な研究内容

①研究のねらい

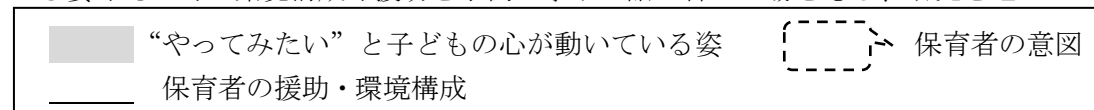
“やってみたい”と思ったことを実現させながら遊びを進めていくためにはどのような環境構成や援助の在り方が必要であるかを探る。

②研究の重点

- ・子どもが心を動かし、遊び込むために必要な環境構成や援助の在り方を探る。
- ・新しい生活様式を踏まえながら、子どもの思いが実現できるような保育内容の工夫に努める。

③活動の方法

遊びや活動の中で、子どもが“やってみたい”という思いから遊びを実現させていっている姿やその時の環境構成や援助を事例に挙げて話し合いの場をもち、研究を進めていった。



【事例1】

4歳児 1学期 「3、2、1で流そう」

ねらい ○ 友達と一緒に水の感触を楽しみながら遊ぶ。

○ 同じ場にいる友達の遊ぶ姿を見て、一緒にやってみようとする。

子どもの登園前に複数のタライに水をたっぷり溜め、砂場の近くに置いておく。砂場にきた子どもが砂場に残っていた水を流した跡を見て「海ができそう」とバケツに水を汲んで流し、たくさん水が溜まると足を入れて遊んでいた。保育者も水に入り、一緒にやってみると、その様子を見て周りにいた友達も同じように水を流したり、入ったりして水の感触を感じながら遊び始めた。

分散して遊べる様に多めに用意しておく。

同じ場にいる友達が遊ぶ様子に興味をもってほしい。

近くで桶に水を流して遊んでいた A 児が思いついたようにタライを砂場に向かってひっくり返した。すると、勢いよく水が流れ、周りにいた友達が驚きの声をあげ、流れてくる水を受けたり、たくさん溜まった水に入ったりして楽しんでいる。A 児が何度も繰り返してタライを使って水を流す様子を見て B 児も同じようにやってみようとするが砂場までの距離が長く、重たくてなかなか運べず困っている。B 児が「一緒にもって」と大きな声で言うと近くにいた友達が一緒にタライをもち、砂場まで運ぶ。水に濡れたくない子もいるため、保育者が「流すときは知らせてあげようか」と提案すると、「流すよ」と大きな声で知らせ、友達と一緒に「3、2、1」とカウントダウンをし、一気に水を流した。「キャー」と声を上げて喜び、「気持ちいい」「流れてくるよ」と水の勢いや感触などを思い思いに感じ取りながら遊んでいた。



同じ場にいる友達が驚かないようにしてあげたい。

<反省・評価>

- ・砂場に水を流した跡が残っていたことで「海ができそう」というイメージをもつことができた。存分に水を使えるように複数のタライに水を溜め、砂場の近くに置いておいたことで、子どものやりたいことをすぐに実現することができた。子どもの思いに共感したり、保育者も一緒に遊んだりして楽しい雰囲気をつくったことで、周りの子どももやってみたくて遊びに参加する姿につながった。

【事例2】

5歳児 1学期 「山から滑りたい」

ねらい ○ 自分なりに試したり工夫したりしながらダンボールを使って遊ぶ。

○ 友達と共通の目的をもって思いや考えを出し合う。

4歳児クラスの時からダンボールでよく遊んでいた姿があったので、3カ月の休園後に安心して遊べるように保育室や倉庫にダンボールを準備しておいた。

園庭で保育室から持ってきた板ダンボールの上に友達を乗せて引っ張って遊んでいた。ダンボールは重みですぐに破れてしまったり、思うように進まずに困っていたりしている様子があったので、遊びの途中で話し合いの場をもった。すると斜面なら滑るかもしれないという意見が出た。「山から滑りたい！」と築山から小さなダンボールで早速滑り始めた。保育者も一緒にやってみるがうまく滑ることができず、「どうやったらうまく滑れるのかな？」と子ども達に投げかけた。家で経験から草が生えている所を滑ってみたり、ショベルをボートのオールのように漕いだりして試していたが思うようにはいかなかった。

次の日、遊びの前に話し合いをもつと「もっと大きいダンボールを使ったら滑るかもしれない」という意見が出た。子ども達は倉庫から大きなダンボールを持ってきて築山まで運んできた。偶然足をすべらせた子がダンボールの上をすべっていったのを見て“ダンボールの上なら滑れる”ということに気が付き、座ったり寝転んだりしていろいろな滑り方を試していた。

他児が「もっとつなげたら長くなっておもしろそう」と言い、倉庫からもう1枚大きなダンボールと保育室からガムテープを持ってきて長くつなげた。小さめのダンボールをもってきた子がそのの上に乗って大きいダンボールの上を滑り始めたのを見て、他の子どもも真似して繰り返し滑る姿があった。

身近なダンボールを使って遊びが広がってほしい。

子ども達自身で必要な素材を選んで遊びに使ってほしい。

困っている事をクラス全体で共有して遊びを深めたり、他の子にも遊びを知ってもらったりしたい

継続して遊んでほしい。

子ども達同士で話し合う時間をもつことで、考えを出し合ってもらいたい。



<反省・評価>

- ・様々な大きさのダンボールやガムテープなどの材料を準備しておいたことによって、子ども達が必要なものを自分で選んで遊びを進めていく姿が出てきた。
- ・クラス全体で話し合いの場を設けたことで、子ども達同士でやりたいことがどうしたらできるのかを話し合うことが出来た。
- ・継続して遊べるように時間を確保したことで、友達と考えを出し合いながら何度も試す姿につながった。

【事例3】

3歳児 2学期 「キャンプしてるねん」

ねらい ○保育者や友達と関わりながら、したい遊びを楽しむ。

A児とB児が手押し車の中に木の枝や木の皮を集め、キャンプごっこを始めた。保育室でカラーボックスをコンロに見立てバーベキューごっこをしていたので、コンロに使えるような低めの机があることを知らせ、一緒に机を運んだ。「たくさん木を入れたら火が強くなるよ」と机の下に木の枝や木の皮を置き、「熱い」と言ったり、ごちそうをつくったりする姿が出てきた。その後、A児とB児の遊びに興味を示した他児が「何してるん？」と尋ねると、A児が「キャンプだよ」と答えた。保育者が机の下に木を入れ、火をつけてキャンプをしているんだってと伝えると他児は「焼き芋みたいに葉っぱ入れたらもっと燃えるかも」「赤い葉っぱが火に見える」などと思ったことを言いながら、葉っぱや木の枝を机の下に入れ始めた。

翌日もキャンプごっこは続き、B児はお肉に見立てた木の皮にお椀の中に入った砂をかけて遊んでいた。保育者が「何をかけているの？」と問いかけると「チーズ!」と答えた。「お肉にチーズをかけているんだって」と周りにいた子ども達に伝えると「自分もしたい」とお椀やスプーンをもってきて、自分の好きな味をかけたり、食べたりして遊んでいた。

保育室での遊びや自分達の経験をもとにしたい遊びを実現してほしい。

友達のしていることに興味をもち、一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい。



<反省・評価>

- ・保育室での遊びから低めの机があることを伝えたことでA児とB児の中でイメージが膨らみ、遊びが広がった。遊びが続いていたことや保育者がA児とB児の行動や遊びを他児に丁寧に伝えたことで、焼き芋パーティーのことを思い出し自分の経験を取り入れて遊ぶ姿や、“やってみよう”という気持ちにつながった。

【事例4】

4歳児 3学期 「今日は何の修行する？」

ねらい ○自分なりの力を出しながら、いろいろな遊びや活動に取り組もうとする。

2学期後半から縄を使って色々な遊びをしてきたが、跳べるようになってきた子とそうでない子とで縄遊びにかかわる意欲に差が出てきた。そんな中、1月下旬に鬼の面を製作し、鬼に興味をもち始めていた子ども達とのやりとりから鬼に勝つために“もっと強くなるよ”“修行が必要だ”という話になっていった。保育者が以前からしていた縄を置いてジャンプすることを「今日は山の修行をやってみよう!」と表現し提案すると、「そんなの簡単や!」と意気揚々と始めようとする姿があった。翌日「今日は何の修行する?」と楽しみにしている子ども達の姿から「今日は川の修行です!どんな修行ができるかな?」と子ども達にしたいことを聞いてみると、「長

「次は何か?」「早くやってみよう」を引き出せるように、以前からしていたことを取り入れる。

自由が利く縄の形状、色々な遊びをしていたことを思い出して活用してほしい。

くして、その上を落ちないように歩く」「ブーランってしてるところを跳ぶ」等色々な意見が出た中から「それってどんな風にするの?」と聞くと「友達が縄をもってユラユラしてそこを跳ぶよ」と思いを形にしてやってみた。次に難しいところがあると「どうしたらいい?」と意見を出し合い皆でやってみるという流れを繰り返してきてきた。また、グループごとに分けて修行をすることで密も防げ、友達の姿を客観的に見ることができ刺激を受けている姿も見られた。他にも何種類か修行をして遊んでいるところを参観で見てもらうことになり、子ども達はドキドキしながらも見てもらう喜びを感じ、修行を披露していた。その後、生活の色々な場面でも修行という形で遊びながら取り組むことで頑張ろうとする姿が増えた。また、縄で遊ぶ楽しさを感じ、高速ジャンプやグーパージャンプ等自分で考え見せたり、前跳びができるようになった友達を見て、より頑張ろうとしたりするなど前向きに縄遊びに取り組むようになってきた。

自分なりに考え、伝えたことを皆で遊ぶことで、自分の考えを認められ自信をもって発言できるようにする。



<反省・評価>

- ・縄跳びイコール跳ぶというイメージが先にあり、跳べない子は楽しくない気持ちの方が強くなってくるが、“修行という遊び”や“鬼に勝つという目標”ができたことで楽しく取り組めた。
- ・子どもががしたいと思ったことクラス全体で取り組んだ。それを保護者にも見てもらったことで自信が付き、次の意欲につながったように思う。

5. 研究の成果

- 子どもがいろいろな環境に関わり友達と共に試行錯誤したり、遊びの中での偶然起こったりしたことが気付きとなり、“やってみたい”“もっと遊びたい”と心を動かして遊びを展開していった。
- コロナ禍で遊びの場と場を離したり、遊びの数を増やしたりしてきたことで、子ども達がじっくり遊びに取り組み、自ら遊ぼうとする姿となった。
- 今までの経験を思い出せるように子どもの目に付きやすい場所に思い出すきっかけになるような道具やつくったものを置いたり、いつも同じ場所に道具や素材を置いたりしておくことで安心して遊びだせるようにしてきた。“やってみたい”と思ったときにすぐにできるように素材や道具を常に用意することで子どもの思いに寄り添うことができた。
- 友達との遊びの中で困難なことや上手くいかないことがあっても、保育者が子どものつぶやきや発想を拾い上げたり意図的に話し合いの場をもったりしたことで遊びが継続していった。さりげなくいろいろな素材や用具を準備したり、一緒に面白がって遊んだりすることで次の“やってみたい”につながっていった。

6. 今後の課題

- 3カ月の休園があったことで、園生活のリズムを取り戻すまでに時間がかかり、遊び込む経験を重ねることが難しかった。子どもの実態に合わせて保育計画を立て遊びの時間を確保していきたい。
- 今後も、保育者間で遊びの環境について相談しながら、子どもが“やってみたい”“試してみたい”と自由な発想で自ら選んで遊べるように厳選した素材・用具を十分に準備していきたい。
- 環境を構成していくタイミング、保育者の援助の仕方での遊びはどんどん変化していった。すぐそばで思いを受け止める保育者の存在が子どもの“やってみたい”という姿につながったことから、保育者間で環境構成や援助について話し合い、子どもの遊びや育ちを共通理解していく時間の確保をしていきたい。